六家文選

石島津忠夫
川真弘
編

古典文庫

六家注孫子

石島
川津
真忠
弘夫
編

古典文庫

古典文庫第三五八冊

昭和五十一年九月五日刊 ©

非売品

抄歌連家六

編者 島津忠夫
石川真弘

発行者 吉田幸一

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所 114 東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二
電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九一一四五九七番
古典文庫

目次

六家連歌抄……五
上巻　連歌抄（京都大学文学部顕原文庫蔵）……五
下巻　六家連歌抄（高野山大学寄託金剛三昧院蔵）……九七
宗柳雑談聞書（太宰府神社小鳥居氏蔵）……二〇七
解説……二二七
六家連歌抄……二二九
宗柳雑談聞書……二三六

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

凡　例

一、『六家連歌抄』の上巻に相当する京都大学文学部頴原文庫蔵本、下巻に相当する高野山大学図書館寄託金剛三昧院蔵本および、太宰府神社小鳥居氏蔵『宗柳雑談聞書』は、いずれも孤本で、それを底本として、忠実に翻刻した。

二、翻刻に際しては、次のような方針に従った。

1　漢字、仮名遣い、送り仮名等すべて底本のままとしたが、仮名は平仮名に統一し、漢字は原則として現行活字に改めた。

2　底本の誤脱、誤字などはそのままとし、明らかに底本の誤りと認められる場合に限り、（ママ）と傍注した。

3　虫損等で不明の文字は□で表わし、右に（　）を付して推定を記した。

4　『六家連歌抄』は、下巻の底本に準じて、上巻にも、各作者の上に、㈠㈡…㈥の漢数字を付し上・下巻通じて、各部立、各作者別に一連番号を付し

た。

5　『六家連歌抄』は、一面の本文の終る箇所に」を付し、その丁の裏面の本文の終る箇所に」五のごとく、丁数を掲げた。

6　『宗柳雑談聞書』は、私に句読点を施した。

三、『六家連歌抄』上巻および『宗柳雑談聞書』は島津が、『六家連歌抄』下巻は石川が原本調査の上で原稿を作り、写真により相互に検討を加えた。

四、本書の成るに際しては、翻刻の御許可を賜わった京都大学文学部、高野山大学付属図書館、小鳥井寛二郎氏、本書の刊行を快諾してくださった吉田幸一氏に、深く感謝の意を表する次第である。

昭和五十年十二月

石川真弘
島津忠夫

六家連歌抄　上

（京都大学文学部頴原文庫蔵）

連歌抄

夢庵

(一) 春

かすめる空に心こそゆけ

1 ちはやふる神代の春のいかならし
　青柳の外は吹ぬる風もなし

2 よもはかすみにかつらきの山
　やとの物ともみえぬ梅かゝ

3 かすかなる柴のかきねの夕かすみ
　ほころひけりな花の香そする

4 一重なるかすみの衣ふく風に
　はたをりやらぬ風の青柳

5 霞をやけさうくひすのうす衣

春草毎にてうのたはふれ

6 うすき日を野路のかすみに風たえて
住いほさひし野辺の古道

7 一むらの竹の葉かしけ梅さきて
おほろ月夜はさたかにもなし

8 梅かほるまくらは夢もあくかれて
さくらうつろひやまふきの花

9 青柳を春の衣にをりそめて
梅うちかほりあらしたつ声

10 夕月夜霞なからやふけぬらむ
あたにすましの大はらのおく

11 おほろなる月も清水を心にて
ほろそかなるはいさめかひなし

└二

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

12 朝露に花の心のとけやらて
花もやはたのむをいとふ陰ならん

13 さくらををもみやとる夕つゆ
こゝろを春になにとさためん

14 たえて世にさかすは花とみんもうし
ひとつ心のなにかはるらむ

15 かつ咲てかたえまたるゝやまさくら
むかふかゝみはくもるともなし

16 山とりのおのへの花のうすかすみ
竹一むらのかけたのむなり

17 いさよふや花にけたるゝ夕かすみ
みえんをたのむ夢ようつゝよ

18 夕あらしかすめる花のいかならん

かすむやいつことりの一声

19 世は花のみてるかほりに風たえて
すたれをまけは風そみにしむ

20 から衣花のにほひをまちとりて
我にもあらす心なるそら

21 花かほるまくらを夢の曙に
おいらくもまたすてんみちかは

22 衣手をひきてもつれよ花の陰
まことのみちををしふるはなし

23 花もやとゆけは桧原のよふ子鳥
ふりにし里のつてなきかせそ

24 ちりちらす行てこそみめ花の陰
心あるひとのゆふくれの空

」三

25 おもふをもおらてそ帰花のかけ
やせたるむまは行としもなし

26 花の陰詩をうそふきて帰るさに
いまはたおもふならのいにしへ

27 雲とみし人をや花もしのふらん
こゝろつくせもこと(ママ)はりの人

28 かすかなる花に門さす山のかけ
心ほそくもぬる夜かなしも

29 雨なから花おちつくす草のいほ
たま〳〵とふもよその帰るさ

30 やふはらのかくれは花も花ならて
かゝれとてこそいひもそめつれ

31 一本を風のよきけるはるの花

└四

一すちのおもひにさらはなしはてよ

32 とたえてはまた花に山かせ
めをとちてしれ人のありなし

33 さけは散る花にみたさしわかこゝろ
ならはしわひぬ山かせのさと

34 はかなくもことしのみちる花とみて
たのむやいつちすくる鳥の音

35 花に身は別てをかむ方もなし
花ゆへつくす身をはおしまし

36 ふかれゆく小てうにあらき春のかせ
わけもつくさぬ野辺の夕暮

37 春日をや小てふもとりもおしむらん
小蝶ともなくはるかにそ行

38 をとめ子かなつなつみやつす園古て
空に立てやちりとみゆらん

39 かすむ野ゝ風のうへなる夕雲雀
霞によはき春風のころ

40 つはさもやあさ露なから立ひはり
たちよらはやの春の山もと

41 友としも憂身をえやはよふ子とり
おりつる花の枝そ色そふ

42 やま里の春をあはれふみやこ人
吹すてし風も柳に猶みえて

43 さとはかすみのまへの夕河
あらしに夢は任はてけり

44 ゆく春のおもはぬやたか花ならん

└五

└

こゝろもしほる此ころの雨

45 花をのみおもひめくらす春のくれ
おしむにくるゝ春そつれなき

46 あり明の月に花さへやすらひて
何にもよらすたゝ心のみ

47 くれはてゝむなしき空も春の色
雨にうつろひ風にちる花

48 あちきなやかゝらはなにの春の夢

(二)

ゆくすゑとをくかすむみか月

1 やまの端の雪に春風吹初て
木末はるかに雨かすむやと

宗祇

└六

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton